

日韓基本条約締結以前における日韓交流の一側面

佐 道 明 広

はじめに——非正規ルートでの交流の役割

戦後日韓関係史の研究については、近年日韓両国で公文書が開示されてきており、それを基にした研究も進んでいる。もちろん、その前から政府間交渉にとどまらない日韓交流史に関する研究も、進捗してきている¹⁾。筆者は二〇〇四年から、静岡県立大学小針進教授とともに、日韓関係に功績のあった人物に対するオーラルヒストリーを行っている。そこでは多様な内容の日韓交流の状況が語られており、現在十分に研究が行われているとは言えない課題も多い。もちろん政府間の交渉が実現して国交が開かれてこそ、両国の正規の交流が行われるのであるから、政府間交渉の重要性は指摘するまでもない。筆者が述べたいのは、日韓が政府間交渉を行って一九六五年に日韓基本条約を締結する前から、日韓両国には相互の交流のパイプが存在しており、それが無視できない重要な役割を持つて

いたということである。そこで小論では、オーラルヒストリーを実践する過程で浮かび上がった、政府間の交流以外の分野で重要と思われるものについて指摘することにした。

では、日韓基本条約が成立し、正規の国交が開始される以前からの交流のパイプとして何が重要なのか。戦前から日本に在住していた人々が、韓国からくる人の受け皿になっていたことは、筆者がここで改めて指摘するまでもない。ここで取り上げたいのは、宗教（教会）と情報である。簡単に説明しておきたい。まず宗教からである。

ここで言う宗教とは、具体的に言うとキリスト教会のことである。のちに本論で二つのケースを紹介したいが、韓国においては人口の約三〇パーセントがキリスト教徒であり、その影響は大きい。しかも、多くの指導的立場の人々がキリスト教徒である。韓国のキリスト教会は海外への宣教活動が活発なことで知られており、日本のキリスト教会との関係も深い。さらに、第二次大戦後の植民地からの独立、そして朝鮮戦争という動乱の過程でもキリスト教会は様々な役割を果たしてきたと言われている。ここで紹介するのは、キリスト教を媒介として日本との関係を持つにいたった有力者のケースである。これは正式の国交が成立する以前の段階において、キリスト教が韓国の人と日本を結びつける役割を果たした事例である。

次に、情報である。独立間もない韓国は朝鮮戦争で一転して軍事態勢に転じることになった。朝鮮戦争はいまだに停戦であつて、戦闘がいつ再開するかわからない状況下で、軍事の重要性は極めて高かった。実際の戦闘が行われていない状況で重要なのは、情報である。韓国の直接の敵は北朝鮮であるとはいえ、朝鮮戦争では中国も参戦し、ソ連の協力もあつた。すなわち、冷戦下での国際対立が朝鮮半島にも持ち込まれていたわけで、中国やソ連、そして社会主義についても情報を収集すべき対象となっていた。もちろん、米国が最有力な情報提供者であるが、中国やソ連、そして社会主義に関する情報源の一つに日本からのものがあつたのである。

小論は、以上の二つの問題について具体的事例を紹介することで、今後の重要な研究課題とすべきことを指摘することにしたい。

国交成立前におけるキリスト教の役割

（一）張聖萬元国会副議長の場合

最初に紹介するのは張聖萬氏のケースである。張氏は教育者であり、国会副議長を務めた政治家でもある。簡単に経歴を紹介すると、一九三二年釜山市に生まれ、米国のシンシナティ神学大学及び同大学院に学び（一九六三―六四年）、七五年に米國ミッドウエスト大学で神学博士号を取得。六六年に現在の東西大学の前身である東西キリスト教実業学校を設立（九二年東西大学校設立）。八一年三月から八九年二月まで全斗煥政権の与党・民正党の国会議員であり、八七年には国会副議長を務めている⁽²⁾。

張氏によれば、同氏は祖母の代からのクリスチャンであり、朝鮮戦争開始前に神学校に通っていたという。その時、日本で布教活動を行っていたマーク・マクセイという宣教師に会ったことが張氏のその後を決めたということである⁽³⁾。張氏によれば、彼が張氏に日本への渡航を勧めたという⁽⁴⁾。「彼は」韓国の動乱でみじめな状態になっている国を、近いところから助けようと思って、ここに来たですよ。その方に、私は会いました。会って、この方が僕を、「将来、この人は韓国のリーダーになる人」と考えたらいいですね。で、その人が、大阪に行って勉強しないかと。で、推薦で大阪に行ったし、そのときは一九六一年でしたから、対日交流が何も無いときですね。」

張氏は、国交成立前の日本にわたって、寄宿舎で生活し、各地の宣教師や韓国人が通う教会などを訪れるといった活動をしていたが、実はそれだけではなく、韓国の新聞社から依頼を受け、戦後の日本に関する紀行文を執筆し

ていた。⁽⁵⁾これは第二次大戦後におけるかなり早い段階での日本紹介である。

「新聞社で、「あんた、行って勉強も勉強だけど、戦後日本はどういうふうになったか。全然わかりませんから紀行文を送ってくれないか」と、頼まれました。「やりましょ」といって、これで行ったんですよ。

行って、寄宿舎に入って勉強する間に、ズラツと日本を周りましてね。大阪へ行って、京都、名古屋、東京、ずっと回りました。回って毎日、日本の紀行文を、「きょうの日本」といって送りました。(中略)それと同時に作家にちよつと会ってくださいといつて新聞社から頼まれて、それから僕は丹羽文雄、あの方は東京のICUのあるところですよ。どこに住んでいたか。

小針 三鷹。

張 三鷹にありましたね。三鷹に、自宅は非常によかったんですよ。その方も会って会見記をやって、それから田園調布に行って石坂洋次郎という人に会ってね。あの方は、本当にいい方でしたね。あの方も、また会見記をやりました。それと、その方が「ここに、李垠さんのお宅がある。行って見ないか」といって、行きました。垠殿下は海外に出張中で、李方子さんね、この夫人。日本人の夫人でしょう。そのとき、あの方と会いました。田園調布は非常に印象的に、綺麗で静かだった。

石坂洋次郎さんに会って、『つくられた真実』という小説がありますね。これにサインをくれて、私いまも持っていますよ。それからまた、佐古純一郎という人がありますね。あれは、キリスト教の評論家です。有名な方ですね。あの方もまた会って、会見記を書きました。その方が作品集を十冊、私に全部サインしてくださいました。で、いまの東京知事……。

小針 石原慎太郎。

張 石原慎太郎、「太陽族」といって非常に評判になったでしょう。会うといつて手紙をやりましたけど、会うことができませんね。だから、手紙でインタビューをやりました。それで、出しました。いまのところ、私が考える人はそれね。丹羽文雄、石坂洋次郎、佐古純一郎、こつこつという方の会見記をつくりました。それが後で本になって、『日本の紀行文と付録・日本大衆作家会見記』という本をつくって、売れました。たくさん売れましたね。
（中略）

だから、そのときに何故かわからんけど、僕は日本のことを非常に友好的に書きましたよ。いまも残っていますけど、友好的に書いている。隣の国ですから、仲良くしなきゃいかんと、よくそついうことをずっと書いて、その本を出した記憶があります。それは一九六二年……その頃だと思えますよ。」

張氏はその後、米国にわたり神学の勉強をしてやがて教育者への道を選ぶ。そして釜山に東西大学校を設立するとともに、一時は政界に身を投じて国会副議長を務めたのは前述のとおりである。張氏は日本との交流をきわめて重視しており、東西大学校に日本語科を設置しただけでなく、日本研究センターを設立し、同大学は韓国における日本研究および日韓研究交流の重要な拠点の一つとなっている。また、二〇〇八年九月に調印された釜山 福岡大 学間コンソーシアムにおいて、韓国側は東西大学校が事務局となっており、単なる学術交流にとどまらない日韓の交流も行っている⁶⁾。

張氏が日韓交流に現在も力を注いでいるのは、日本滞在時の、前述の作家などを含めた日本人との交流が基礎にある。

「小針 そのとき、いろんな日本人と接触があったと思いますが、

張 ええ、ありますよ。」

小針 植民地時代ときの日本人のイメージと、旅行中に接触した人たちと。

張 それは、ちょっと違いますね。

小針 変わりましたか。

張 うん。日本人は全部、田代アキラだか松原某ぐらいに思いましたけど（引用者注…戦前に張氏が学んだ学校の教師）、日本に行ったら案外それとは違いますね。それとまた決定的なものは、日本にある韓国の教会をずっと訪ねましたから。非常によい人達にたくさん会ったし、また日本の宣教師達にたくさん会いましたから、アメリカの宣教師。その宣教師と一緒に働いている日本人、こういう人たちたくさん会いましたから。クリスチャンですから、非常に親切でね。

佐道 普段は、大阪では寮に入っているわけですね。それはしかし、韓国の方は先生だけ。

張 もちろんですよ。

佐道 あとは、みんな日本人？

張 アメリカ人も。

小針 当時、日本人の韓国人に対する見方というのは、日本人の中ではあまり好意的じゃない人が多かったんじゃないかと思いますが。

張 いまもそうだけれど、日本に来たら、韓国人が考えている日本と、日本人が韓国に対して、これはわかりませんね。「韓国から来た」「あ、そうですか」といって、何かわかりませんよ。韓国がどこにあるか、わからん人がたくさんあります。そのときに。

小針 要するに、無関心だということですか。

張 無關心。

小針 たたとえば作家はどうでしたか。先生みたいに日本語がすごく上手いと、すぐ韓国人だとわからないで、日本人だと思って接していましたか。

張 うっん。

小針 それは、ないですか。

張 僕はもう韓国人だから、「韓国の新聞に出ます」といって、ちゃんとして行きましたから。丁寧に会って、非常に歓待を受けました。丹羽さん、亡くなられました？

佐道 亡くなりました。去年か一昨年か、ついこの……。

張 あの方は、本当に。作家に会見する前に、作品を読まなきゃいけないけど、あまり読むことができませんでした。だから、あまり深いところはわかりませんが、非常に人間的で大きな人だと思いました。

佐道 日本の作家の集まりのペンクラブの会長を、確か長く務めておられたという。

張 これは、日本を代表する作家でしょう。

佐道 もちろんそうです。

張 とくに仏教、そういうね。

佐道 とくに亡くなる前なんかは、仏教関係の本とか書かれていました。

小針 こっちの大学に一回、招待されればよかったですね。きっと驚きますよ。こんなに大きい大学をつくられて。

(二) 崔書勉氏の場合

崔氏は、東京に韓国研究院を創設し、日韓の研究交流を推進しただけでなく、安重根の史料を発掘するなど自らも積極的な研究を行っており、また様々な分野における日韓の仲介者的役割を果たしている人物である。「月刊朝鮮」に掲載されたインタビュー記事によれば、崔氏の略歴は以下のとおりである。⁽⁸⁾

一九二六年江原原州出生。延禧専門学校文科修了、忠南大大学院文学博士、檀国大名譽文学博士。大東新聞記者、孤児院「聖フランシスコの家」院長、ソウル天主教総務院事務局長、日本アジア大教授、日本東京韓国研究院院長、安重根義士崇慕会理事、全国アリラン保存連合会初代会長を歴任。現国際韓国研究院院長、韓国モンゴル親善協会会長、日韓フォーラム諮問委員。著書…「安重根史料」、「7年戦争(壬辰、丁酉倭乱)」、「モンゴル紀行」、「新しく動かす安重根義士」など。

なお、崔氏の滞日三〇周年を記念した『崔書勉と私』という私家版文集が刊行されており、そこには岸信介元首相との写真や、政界に大きな影響力を持った木内信胤の寄稿などもあり、崔氏の広い交友が見て取れる。⁽⁹⁾

さて、崔氏は延世大学在学中に第二次大戦となり、大戦後は熱心な学生運動のリーダーとなっていた。その崔氏は突然、殺人事件の容疑者となる。その経緯を前述の『月刊朝鮮』では以下のように記している。⁽¹⁰⁾

「一九四八年二月四日、当時の崔書勉氏は韓民党を創党、外交部長・政治部長を歴任し、雪山・張徳秀殺害事件の共犯に指定され逮捕される。(中略)、雪山は一九四七年二月二日、鍾路警察署の警査・朴光玉と延禧専門学生である裴熙範により、ソウル東大門区祭基洞の自宅で殺害された。」

崔氏自身は、この事件に關し、次のように述べている。

「韓独党、韓民党の両党すべてが信託統治を受け入れることができず、米ソ共同委員会に話した日の夜に、張徳

秀が南韓の単独政府を樹立することに同意するというので、大韓学連の学生たちが『学兵に行けと勧誘した誤ちを許されたのが一昨日であるにもかかわらず、また背信をするのか。こんなことだから建国できないんだ』と言っていたことはありましたが、殺そうという考えはありませんでした。事件が発生して数日後に張沢相、盧徳述、崔雲霞などが泰和館で私を懐柔し、連行して水拷問もしました。(略) 海外で三六年間行つた独立運動の途中で帰国し、まだ間もない方たちが『崔先生、貴方がイエスと言ひ、私たちは知らなかつた』と無条件に自白しろと言ひます。金溶植(前外務部長官) 弁護士も『崔先生、貴方が話をしなければ九〇歳の老人たちがみな犠牲になるからと無条件に、真実は裁判で明らかにせよ』と言ひました」

結局四月一日、二二回の公開裁判を経て、米軍政布告令二号違反に基づき、被告一〇人中八人には絞首刑、二人には懲役一〇年が宣告された。しかし米軍司令官ハージ中将がこれを無期懲役から五年に減刑し、全国の矯正所に分けて収監した。崔書勉氏は無期懲役を宣告され、大邱刑務所へ行くことになった。そして、崔氏はここでカトリック入信という人生の大きな転機を迎える。入信から日本亡命までの経緯を、かなり長いが再び『月刊朝鮮』の記事から引用してみたい。朝鮮戦争のときの李承晩政権の様子がよく描かれている。

「崔書勉氏は刑務所で人生の転機を迎える。崔氏の母親が原州で彼を出産するとき、担当医師だつた安思永(作曲家・安基永の兄)氏が刑務所を尋ね、「天主教を一緒に信じよう」と伝道し、カトリック信者になつたのである。(略) 崔氏は一九四九年一〇月、胃腸病により一年六ヶ月後に刑執行停止により釈放される。尹亨重(前・京郷新聞社長)神父に教理講習を受けるころ、六・二五(朝鮮戦争…引用者注)が勃発した。

「六・二五勃発の数日後、教理を学ばうと神父様に訪問すると、明洞城東はすでに人民軍に占領されておりました。尹神父の部屋に行つてみると、『崔先生、地方に急ぎの用事があるので行きますが、帰つてきてからお目にかかりま

す」というメッセージが残されていました。『戦乱中でもこのように約束をきちんと守るといふのなら、天主教を信じるほかにないな』と決心しました」

(略) 避難できない彼は人共治下で光復軍第3地帯出身の金学奎將軍とともにすごした。六・二五時、人民軍により刑務所から釈放された金学奎將軍に、南で避難するよう決心させ、京畿道水原市烏巖里に避難所を提供した。子どもがいなかった金將軍は、そこではじめて息子を得た。(略) 金將軍は六・二五時、拉北から逃れるようにしてくれた崔書勉氏と五・一六後、病んだからだを陸軍病院に入院させ治療してくれた朴正熙大統領を命の恩人に感じたという。申鉉俊海兵隊初代司令官が崔氏に聞かせた話によれば、「自分と朴正熙大統領は光復後、金学奎將軍の光復軍第三地帯に所属されていた」という。

(略) 一九五一年の一・四後退時、崔書勉氏は釜山に避難し、そこで呉基先神父から任された孤児一〇〇人を連れて「聖フランシスコの家」を運営する。米ネブラスカ州オマハ市のエドワード・フラナガン (Edward Flanagan) 神父による、家のない少年たちの保護所であるボーイズタウン (Boys Town) の運営成功をモデルに、崔氏は模範的に孤児院を運営し、この事実はソウルまで伝えられた。(略) このとき崔書勉氏を助けた人が兪鎮午博士の夫人・李容載女史、詩人・毛允淑、現大統領 (金大中…引用者注) 夫人である李姬鎬女史、金学仲・前カトリック医大聖母病院長などだった。

(略) 盧基南 (一九〇二—一九八四) 主教が「教区本部で秘書役か天主教総務院事務局長を任せるから、一緒に仕事をしよう」とし、固辞する崔氏を四回の説得の末に連れていった。これは盧主教のみならず、ソウル教区事務総長である張勉博士との縁を結ぶようになった出発でもあった。

「天主教は誇るべき宗教でした。外国からカトリック神父がくる前に信者 (李承薫) がまず天主教を学んで伝道

したというのは、世界伝道史上に唯一の事例ですよ。そのような天主教ですが、三・一運動のとき、多くの人が万歳運動に積極的に参加したことを誰も教えてあげる人がいませんでしたよ。（略）三三人のうち、カトリック信者が一人もいなかったからでしょう。盧基南、張勉、尹亨重氏など意ある方達は天主教が人材を育てなかつたからそうなったことを痛感していました。そのような状況で、私が盧主教の招請を受けたのです」

（略）崔書勉氏が日本と縁を結んだのは他意によるものであった。李承晩政権は一九五七年、崔書勉氏を六・二五時脱獄者として追い込み逮捕しようとした。彼を救命するために、胃腸病を治療したソウル大病院の医師と尹亨重神父が趙寅九担当検事を訪問したものの、効果はなかった。（略）

「その当時、李承晩政権は選挙で票を変えるなど、不正選挙をやっていましたよ。天主教ではこういうことに我慢ができないのですよ。京郷新聞を通じて猛攻撃をしました。年老いた李承晩大統領が倒れば、政権は反対党である張勉博士に移るであろうという危機感から、張勉勢力の主要人物を排除しようということだと思いました」

（略）彼はダウリング（Walter C. Dowling）駐韓米大使に身辺保護を要請した。しかしダウリング大使は「北からやってきた人と異なり、友邦国である韓国から来た人に亡命を許可することはできない」とした。盧基南主教の斡旋で天主教聖職者に変装した彼は、米軍用機に乗って日本に密航した。

（略）空港に出迎えに来ていた日本天主教信徒会長の案内で当分のあいだ身を隠した。しばらくすると韓国にいるポルトガル、キューバの神父たちの努力で、これらの政府から亡命許可を得た。崔氏は密航者の身分で、初代文部省大臣に就いた田中耕太郎・当時最高裁判所長（大法院長）を訪れ、出国できるよう助けを要請した。

（略）田中耕太郎所長は「法の守護者として密航者を密出国させることはできない。私が身元保証をするから自首して特別滞留許可を得なさい」と勧誘した。崔氏はこの勧誘を受け入れて、身元保証は田中耕太郎最高裁判所、財

政保証は聖心女子大学理事長であり聖心修道会極東管区長のブリジット・キオ (Brigitte Keog) 修道女がする」となった。

「田中耕太郎先生が『亡命生活とはさぞや苦しいものだろう』と、ピアノを学んで慰安するよう薦めてくれたことを思い出します。ピアノは習いやすく、四十を越えて習った自分も一年に一度、独奏会を開くことでした。そのころ当初、イタリアに留学でもしようかと思つた私の考えを変えたのもその方ですよ。日本人たちに韓国を正しく認識するよう指導することも、この時期には必要なことではないのか、と」

(略)その後、文部大臣を務めた太田耕造・亜細亜大学総長と財政保証人ブリジット・キオの経済的支援により、本格的な韓国学研究に突入する。満五年間。雨が降ろつと雪が降ろつと、日本の国会図書館で資料の中に埋もれてすごしたといふ。

「韓国の歴史を何一つ知らない私がどれほどの韓国人であろう? 毎日毎日、勉強するほどに知らないことが多いという事実には、恥ずかしくなりました。内心、イタリアに行かなくてよかつたと思ひました」

以上が、『月刊朝鮮』が記す崔氏の入信と亡命の経緯である。ちなみに、ここに登場する田中耕太郎は、元は無協会派キリスト教であったが妻の勧めでカトリックに転じ、以後は熱心なカトリック信者となつたことで有名である。⁽¹⁾

崔氏の日本亡命については、日本の参議院でも不法入国問題で審議が行われている。『月刊朝鮮』とは細部で異なる部分もあるが、日本での事情についてはこの時の審議で詳しく語られている。⁽²⁾

「野田哲君 成田の問題についてはそれぞれの所管の委員会がありますから、これ以上は、その後の経過を見てまた質問したいと思ひます。

法務省設置法に関連して出入国管理の問題について伺ひたいと思ひます。

東京都の港区にある韓国研究院の院長をやっている崔書勉という人が日本に入国をしたのはいつですか。

政府委員 (吉田長雄君) 崔書勉氏は昭和三十二年六月ごろ不法入国をいたしております。その後東京事務所に出頭いたしましたして、不法入国をしたということとを申告いたしましたので、今度は退去強制手続がとられたわけですが、この方は反李承晩派として活躍したということで、本国で逮捕命令が出ていると、政治亡命的なことをおっしゃって、いろいろ審査して、結果、法務大臣の特別在留許可が出たわけでございます。

野田哲君 三十二年の六月ごろに不法入国をしてきたという、この不法入国は、どこにどういう方法で不法入国をしたわけですか。

政府委員 (吉田長雄君) ただいま申しました東京事務所に出頭いたしましたのが、不法入国したちようど三年後の昭和三十五年六月六日に出頭いたしております。三年たった後でございますが、いろいろ尋ねたんですが、飛行機で来たということで、どこへ着いてどうなったのかということは全然確認いたしておりません。また確認できなかったということでございます。

野田哲君 確認できないというのは、これは私はちよつとつかつだと思つんですが、私の調査したところでは、これはアメリカの軍用機で立川基地に入ってきている、こういう情報を得ているわけです。で、この出頭するまでの三年間どこで何をやっていたか調査をされておりますか。

政府委員 (吉田長雄君) 何分古いことでございますので、ファイル調べているのでございますが、たしか韓国カソリックの歴史を調べるために、何かカソリック信者のところにかくまわれていたといふふうに聞いております。

野田哲君 不法入国して退去強制手続をとられた者が法務大臣によって特別在留許可になった、これはどのよ

うな理由で、不法入国した者、退去強制手続がとられていた者がなぜ三年後に特別在留許可が与えられたんですか。

政府委員（吉田長雄君） ただいま申し上げましたように、これはまだ李承晩政府の時代のごことでございまして、本人の申し立てによりますと、張勉氏とともに反李承晩運動をしたということで、何か逮捕令状が出てきたために身の危険を感じて日本国に急遽不法入国してきたということでございます。要するに政治亡命的な点が本人の申し立てにあるわけでございますが、他方、本人はここで、ただいま申しましたように、韓国のカソリックの歴史の研究をもつぱらしたいということで、保証人も確実な保証人もあり、したがいまして生活上問題がないということ、そういう点を考慮して法務大臣の在留特別許可が出たわけでございます。

野田哲君 この特別在留許可については、一説によると、これはもう名前を出してもいいと思うんですが、当時の最高裁の長官の田中耕太郎さんがそのことずいぶん奔走されている、こういう情報がありますが、いま入管局長は確実な保証人があったというふうに言われておりますが、この確実な保証人というのはどなたでしたか。

政府委員（吉田長雄君） これは民間のカソリック信者でございますが、田中先生とかそういうことじゃなしに、余り一般に知られていない信者さんでございます。

野田哲君 あんまり一般に知られていないカトリックの信者というのが確実な保証人ということになるんですか。

政府委員（吉田長雄君） ただ、その人の社会的——何といいますが、しっかりした会社にちゃんとしたポストでおられると、そういう意味でございます。

ここで質問している野田哲参議院議員は社会党で、当時社会党は韓国ではなく北朝鮮を正統政府としていたから、

韓国と日本の間に立つて活動していた崔氏への追及に及んだものと思われる。

重要なことは、崔氏の亡命にあたって日韓のカトリック教会が重要な役割を果たしていることである。国家と教会の關係が西欧世界ではきわめて重要な問題であつたし、政治学上もいまだに主要な課題となっている。そういった原理的問題だけにとどまらず、日本の場合宗教問題への認識がきわめて低いが、バチカンを中心としたカトリック教会の政治力および政治との關係は、きわめて大きな課題である。たとえば、第二次大戦末期に、バチカンが関係した終戦工作があつたことはよく知られている。¹³⁾ 第二次大戦でバチカンが果たした役割については様々に語られているが、詳細はよくわからない。¹⁴⁾ いずれにせよ、無一文で亡命してきた崔氏を助けたのが日本のカトリック教会であつたことは間違いない。強力な組織力をもつカトリック教会が国家を超えた活動を行つていて、その一環として崔氏の亡命に助力したわけである。逆に言えば、日本でのカトリック教会の活動、崔氏への庇護がなかつたら、崔氏の亡命は成就しなかつた可能性も高いのである。

・ 情 報

康仁徳（元韓国統一部長官）の場合

康氏は、韓国を代表する情報分析の専門家である。経歴は以下のとおりである。一九三二年一月一〇日、平壤生まれ。一九五〇年平壤第一高校卒業。朝鮮戦争後、韓国に移り、一九五八年韓国外国語大学ロシア語科卒業。韓国の創設間もない中央情報部に入り、一九七一年中央情報部海外情報局局长、一九七二年中央情報部北韓情報局局长（初代）兼南北対話協議会事務局長、一九七五年中央情報部心理戦局局长、一九七七年中央情報部北韓局局长、一九七九年極東問題研究所所長兼理事長（一九九八年）、一九八一年平和統一政策諮問会議理念制度分科

委員長（一九九三年）、一九九三年（榊極東文化代表理事）（一九九八年）、一九九八年統一部長官（一九九九年・金大中政権）。

一見してわかるように、康氏は対北朝鮮情報活動を中心に活動している。ただし、康氏の場合、情報工作ではなく情報分析が主たる分野であったことが注目される。いわば、韓国における北朝鮮情報分析の第一人者である。¹⁶前述のように、草創期の韓国中央情報部にあって、実務レベルで対北朝鮮情報分析の手法を開拓し、実績を作ってきたのが康氏であった。¹⁶

さて、では康氏と日本との関係はどのようだったのだろうか。康氏自身が、次のように語っている。¹⁷

「私は北朝鮮の平壤の出身です。平壤第一高級学校（平壤高等学校）で勉強した。家族は朝鮮戦争（一九五〇―一九五三年）の前の四七年に南に来ていたが、私は遅れて南に来た。休戦となって韓国軍にいた私に、『北の高等学校の皆様』という北の青少年に呼びかける放送をやる機会があつて、それを当時の（韓国）内務省が聞いていた。さっそく内務省に呼ばれた。『北朝鮮を勉強しないか』というわけです。一九五〇年代の韓国で、それも内務省で共産主義を勉強したのは私ぐらいではないかな。しかし当時の韓国にはソ連の文献がなかった。それで日本の『大陸問題研究所』というところに、理由を書いて手紙を出した。すぐに（ソ連共産党に関する）本を送ってくれました。『大陸問題』という雑誌を出していたところで、これをやっていたのは元関東軍情報局長の土居明夫さん。ソビエト軍事戦略の専門家だ。一九五〇年代、私は日本の方々の協力でソ連共産党について学んだ。

日本に行き、情報関係者にも会つた。なぜ、日本に学んだのか。日本が中国、ソ連と戦争をしたから。戦争をやつた国が相手のことを一番知っている。」

以上のように、崔氏にソ連共産党について最初に情報を提供したのが日本の情報関係者だったのである。ただし、

日本政府に直接ということではなく、旧軍隊関係者との接触ということである。康氏のインタビューにある土居明夫は、ソ連通の陸軍軍人で中将で終戦を迎えた⁽¹⁸⁾。土居は、再軍備を熱心に主張した芦田均の日記にも登場する人物で、在野ではあるが、政治家にも信頼の厚い人物であった。

実は周知のように、戦後の再軍備の過程において、旧陸軍関係者は戦争への関与度が高いことから忌避されていた。旧軍の将官クラスなら直さらで、五〇年に創設された警察予備隊、五二年の保安隊、そして五四年の自衛隊からは排除されていた。特に、再軍備を求めて活動したグループの代表が服部グループと言われている。このグループは、戦時中長く参謀本部の作戦課長を務めた服部卓四郎大佐を中心とし彼の同期（陸士34期）の西浦進大佐、堀場一雄大佐を両翼とするものであった⁽¹⁹⁾。このグループは、井本熊男、稲葉正夫、原四郎、水町勝城、田中耕二、田中兼五郎、山口二三など参謀本部、陸軍省の中核にいた将校で構成されていた⁽²⁰⁾。このグループの活動は、占領軍参謀二部（G2）のウィロビー少将が後ろ盾となっていたことはよく知られている。

終戦後、大部分の職業軍人は追放されたが、外地に残る日本兵の復員のため、少数の将校が占領軍の指令で復員省（後には厚生省復員局）に残って復員業務を担当していた。ウィロビー少将は、戦後マッカーサーを中心にした戦史編纂を計画し、そのためかつて日本陸軍の作戦立案の中核にいた服部に目をつけ、戦史編纂への協力を依頼したことから関係が密接になったといわれている。ウィロビーは強烈な反共意識をもった軍人で、米ソ冷戦の進行にともない、服部グループを中核とした日本再軍備を強硬に推進しようとはかるのである⁽²¹⁾。

ところで復員省に残った旧軍人に対して、ウィロビーは単なる復員業務を越えた日本国内の共産主義の動静、対ソ情報などの収集といった任務を託していた。ウィロビーにしてみれば、そういった任務のためにも旧軍人の温存が必要であり、その窓口になっていたのが終戦時の参謀本部次長であった河邊虎四郎を中心とする「河邊機関」で

あった。⁽²²⁾ すなわち、旧陸軍の対ソ連、対共産主義情報は米軍によっても高い評価を得ていたわけである。

旧陸軍関係者では、吉田茂首相の直接の依頼によって、首相の個人的な軍事顧問として辰巳栄一中将が占領軍との連絡役にあたっていた。⁽²³⁾ これに関係する者は「辰巳機関」といつているが、「河邊機関」の存在は吉田には内密のものとなされたものの、実際は「辰巳機関」と「河邊機関」はまったく別個に活動していたわけではなく、重複している部分がかかなり多かった。⁽²⁴⁾ ただし、「辰巳機関」も「河邊機関」も、戦後中央に残った旧軍人を率いて軍再建の推進勢力になったわけではなく、そのための具体的な構想をまとめてもいなかった。その点については「服部グループ」こそがウィロビーの力を借りて、まさに再軍備の中核としての役割を担うはずであり、四九年頃からは再軍備に関する構想をまとめたり、軍再建の中核となる人員のリスト作成や編成なども検討していた。⁽²⁵⁾

しかし、「服部グループ」の活動は「辰巳機関」あるいは「河邊機関」の者にはほとんど知らされておらず、秘密性の高いものであった。しかも、戦時中作戦の中枢にあつて言わば敗戦の責任が重い者たちであり、さらに東条英機首相の秘書官を務めた者が三名（服部、西浦、井本）もいる同グループのことを吉田首相は忌避していた。また、同グループに近いといわれている者でも実は距離を置いていたとする者もあり、本来は支援を受けてよいはずの辰巳らの将官グループとはまったく独自に、ウィロビー及び参謀二部の力のみを背景に、かつての中堅幕僚層を中心に活動していたところにこのグループの性格と限界が表れていると言えよう。⁽²⁶⁾

この服部グループが、警察予備隊創設に際し、ウィロビー及び参謀二部の後援を得て偽名を使ってまでも組織内に入ろうとしたことはよく知られている。またこの動きは服部グループを忌避する吉田とそれを支持したマッカーサーによって止められる。⁽²⁷⁾ その後は警察予備隊、保安隊に旧陸軍将校が採用される際にも服部グループ関係者は忌避される傾向にあった。服部グループは、結果的に後の自衛隊へと成長していく組織の中には、なかなか入って行

けなかつたのである。

一方で土居は、こうした服部らの活動とは一線を画していた。ウイロビーの行動に示されるように、旧陸軍の対ソ連情報は、米国も関心を示すほどの質と量を誇っていた。重要なことは、長年にわたって培われてきた情報分析の手法である。冷戦下にもかかわらず、反軍事の風潮が広まり緊張を欠いた日本の中で、土居らは対ソ情報分析を続けていたわけである。そしてそれに注目したのが康氏であり、日韓の情報分析交流とでもいうべきものが始まったわけである。

おわりに

以上で見てきたのは、少しの事例に過ぎない。しかし、張氏、崔氏の日韓交流における実績や、康氏の情報分野での業績を見ると、宗教（教会）と情報という分野が日韓の交流をつなぐものとして無視できない役割を果たしていたことがわかる。

日韓それぞれにおける宗教（教会）の果たす役割、位置づけも重要な研究課題であり、とくに日本においては、この分野の研究は立ち遅れていると言っている。しかも、日韓交流における宗教（教会）の役割といった点については、先駆的なものがあるに過ぎない。²⁸ 筆者は、崔氏の亡命への関与の状況や、政治とのそれまでの関わりから、カトリック教会について特に重視しているが、資料へのアクセスも含めて、今後の研究の重要性を指摘しておくにとどめたい。

情報分野も同様の困難さをもっている。安全保障がかかわる分野であり、資料へのアクセスの困難さが予想される。しかし、現状で言えば、前述の土居明夫についての研究すらほとんどないのである。最近、旧軍の幕僚の戦後

に注目した著作があるが、米国の史料に対する評価・位置づけなど、今後の検討課題も多い。また不十分な分野なのである。

日韓交流に関する研究において、上記の分野に関する研究をさらに進めることが、一層多面的な交流の内容を明らかにするものと考えられる。

付記

本論文は、中京大学二〇〇八年度特定研究助成「口述記録と文書記録を基礎とした日韓関係史および日韓比較政治研究の再構築」の成果である。

註

(1) たとえば先駆的研究は、李庭植（小此木政夫訳）『戦後日韓関係史』（中公叢書、一九八九年）、滯日経験の長い韓国人によるものとして、池明観『日韓関係史研究——一九六五年体制から二〇〇二年体制へ』（新教出版社、一九九九年）など。日米韓の視点での国際政治を分析したものとして、李鐘元『東アジア冷戦と韓米日関係』（東京大学出版会、一九九六年）などがある。

(2) 張氏の詳しい経歴については、『張聖萬（元大韓民国国会副議長）オーラルヒストリー記録』（中京大学 佐道明広研究室、二〇〇八年）参照。以下、『張氏オーラル』と略。

(3) マーク・マクセイは鹿児島を中心に活動を行っていた宣教師で、彼の活動は極めて広範で、多くの信徒に影響を与えたと言われている。彼の活動についての紹介も含めた鹿児島でのキリスト教の内容について、吉井秀夫牧師（鹿屋キリスト教会）の講演録「鹿児島島のキリスト教とキリストの教会の働き」参照。同講演録は下記URLで見ることができる。

<http://www3.synapse.ne.jp/kanoyachrist/kinensi-kouen1.htm>

また、マーク・マクセイ兄弟が日本におけるキリスト教伝道について不記のウエブサイトで紹介している。 <http://www.bible101.org/japanmissions/>

(4) 前掲『張氏オーラル』 一三頁。

(5) 同右 一三―一四頁。

(6) 釜山・福岡大学間コンソーシアムについては不記参照。 http://www.kyushu-u.ac.jp/topics/index_read.php?kind=&S_Category=&S_Page=&S_View=&word=&page=&B_Code=1424

(7) 前掲『張氏オーラル』 一四 一五頁。ちなみに、本論で触れた釜山・福岡コンソーシアムについて、張氏は次のように語っている。

「佐道 中央政府对中央政府ということではなくても、たとえばいま釜山市と福岡市が連携を強めています。たとえば地域対地域というように、福岡あるいは下関とか、そういうことでの交流とか。」

張 だから、いま福岡と釜山のフォーラムをつくりました。

小針 そうですよ、去年。

張 聞きました？ 去年つくりまして今年六月一日に、きょうの新聞に出ましたね。「釜山 福岡フォーラム 理事会 議 三十一日から一日まで日本で開催。韓日戦略的協立法案を探る。釜山市長も、このシンポジウムに参加する」と。僕は、共同会長になっていますよ。釜山 福岡フォーラム討論会長ですよ。」

小針 それで週末、福岡にいらっしゃるんですね。

張 ええ、行きますね。

小針 張先生も行きますね。張済園さんと。

張 行きますね。

佐道 今度の週末ですか。

張 明日、明後日ね。

小針 民正党の釜山委員長をやっているときに、こういふことは全然なかったですか。

- 張 いやいや、なかつた。いまのところ、うちの大学の日本センター長と九州大学の教授と話しあってつくりました。昨年は、釜山でやりました。釜山日報の社長、西日本の社長、それからテレビ社の社長、このKNNの社長、銀行頭取、シティ銀行の頭取、それから九州大学の学長、釜山大学の総長、商工会議所の所長、あそこの会社の社長、そしてその地域の有力者を全部囲んでやりましたよ。
- 小針 こういうのがあると、いいですよ。政治外交で対立しても、それとは別のチャネルになりますから。張 民間レベルでこれをやるのは、非常にいいと思います。前掲『張氏オーラル』六二頁。
- (8) 崔氏については、韓国の月刊誌『月刊朝鮮』に「集中インタビュー」日韓水面下の怪物、崔書勉の現代史秘話」が掲載されている。(月刊朝鮮二〇〇二年六月記事より。Vladimir 訳) 同インタビューは下記ウェブサイトで読むことができる。 http://www.pyongyangology.com/index.php?option=com_content&task=view&id=69&Itemid=31
- 以下、同インタビューは「崔氏インタビュー」と略す。
- (9) 『崔書勉と私——崔書勉滞日三十年記念文集』(崔書勉滞日三十年記念文集刊行委員会 一九八八年)。刊行委員会には、本文で触れた木内の他、金山政英、藤田義郎、鈴木卓郎、林建彦、小谷豪治郎といった人々が名を連ねている。
- (10) 前掲「崔氏インタビュー」
- (11) 田中は商法の専門家であるが、法哲学の分野でも『世界法の論理(全三巻)』(岩波書店、一九三丁三四年)という業績を残しており、その背景にはカトリックの影響があったと言われている。
- (12) 第〇八四回国会 参議院内閣委員会 第五号 昭和五十三年三月三十日
- (13) この工作について、外務省は次のように説明している。「一九四五年(昭和二〇年)五月、バチカンのローマ法王庁ヴァニヨッチ(Vagnozzi)司教は、日本公使館囑託の富沢孝彦師に対して、「一米人」より和平問題について日本側と接触するための橋渡しをしてほしいとの申し出があったと明かしました。この申し出の内容は、ソ連の極東進出への警戒感から、米国側が日本に複数の休戦条件を提示しているというものでした。原田健駐バチカン公使はこれに対し、素性・目的とも明確でない人物とこのような交渉を行うことはできないとの観点から、消極的な回答を先方に伝えました。この回答を受けた「一米人」は、再度ヴァニヨッチを通じて、今後日本側から米国側に伝達希望があれば取り次ぐ準備があることなど

を伝えてきただけで、その後具体的な交渉にはつながりませんでした。」(外務省ウェブサイト、http://www.mofa.go.jp/Mofaj/annai/honsho/honsho/shiryo/qa/senzen_04.html)

- (14) マーティン・S・キグリー著仙名紀訳『パチカン発・和平工作電——ヒロシマは避けられたか』朝日新聞社、一九九二年) 参照。
- (15) 康氏は多くの本も執筆している。『共産圏総覧』『北韓全書』『共産主義と統一戦術』『言語・政治・イデオロギー』『北朝鮮問題をどう解くか』(編著)他、北朝鮮や共産主義関係の著作が多数ある。
- (16) 韓国中央情報部および軍事政権については、金忠植『実録KCIA——南山と呼ばれた男たち』(講談社、一九九四年)、金在洪『極秘韓国軍 上下——知られざる真実軍事政権の内幕』(光人社、一九九五年) 参照。
- (17) 『産経新聞』「グローバルインタビュ」北朝鮮民主化を語る(三)元韓国統一相(現極東問題研究所長)、康仁徳氏(二〇〇八年八月三日)。
- (18) 一九三七年にソ連大使館武官、四〇年には参謀本部ロシア課長に就任する陸軍を代表するソ連通である。ちなみに、康氏のインタビュにある「関東軍情報局長」は正確には「関東軍情報部長」である。土居については、土居明夫伝刊行会編『一軍人の憂国の生涯 陸軍中将土居明夫伝』原書房、一九八〇年) 参照。
- (19) 服部グループの形成については、秦郁彦、『史録 日本再軍備』(文藝春秋、一九七六年)一五六―一六二頁、波多澄雄『再軍備』をめぐる政治力学』年報近代日本研究『強調外交の限界 日米関係史一九〇五―一九六〇』(山川出版社、一九八九年)一八一―一八六頁、保坂正康、『昭和陸軍の研究 下』(朝日新聞社、一九九九年)七五六―七七〇頁参照。
- (20) 『井本熊男インタビュ記録』(一九八八年八月二七日)大嶽秀夫編・解説『戦後日本防衛問題資料集、第一巻』(以下、『防衛関係資料』と略)二七〇頁(以後、『井本熊男インタビュ』と略)。
- 服部卓四郎は陸士三四期、昭和五年に陸大卒業、ノモンハン事件の時の関東軍参謀(作戦主任)、開戦時の参謀本部作戦課長、さらに東条陸相秘書官なども歴任、終戦時は歩兵第六六連隊長、西浦進は陸士三四期、昭和五年陸大卒。堀場一雄は陸士三四期、昭和五年陸大卒。井本熊男は陸士三七期、昭和九年陸大卒。水町勝城は陸士四一期、昭和九年陸大卒。稲葉正夫は陸士四二期、昭和十四年陸大卒。原四郎は陸士四四期、昭和十四年陸大卒。田中耕二は陸士四五期、昭和十四

年陸大卒。田中兼五郎は陸士四五期、昭和一六年陸大卒。山口三三は陸士四九期、昭和一九年陸大卒。

- (21) 秦、前掲書、一五六頁参照。
- (22) 波多野、前掲論文、一八一〜一八二頁参照。
- (23) 辰巳栄一は陸士二七期、大正一四年陸大卒業、三度にわたるイギリス駐在歴があり、とくに昭和一四年からのイギリス駐在武官時代に、当時駐英英国大使であった吉田と親しくなったと言われている。戦後の活動に関しては、高山信武『昭和名将録(二)』(芙蓉書房、一九八一年)二〇〇〜二三四頁参照。
- (24) 波多野、前掲論文、一八一〜一八二頁参照。
- (25) 「ウィロビーは、自分たちが撤退したあとの新軍の編成を服部にやらしておったんです。それはね、服部を長とした約四百名のリストなんです。(略) 私が特に親しかったプラトンが「ウィロビー少将の命で服部大佐がつくったものだ、これを見てくれ」といつて持ってってきたんですよ。それを見ると、新軍四個師団編成の表がでてるんです」(「辰巳栄一インタビュー記録(一九八〇年七月三〇日)、『防衛関係資料』(一)五一〇頁)。
- (26) 服部グループの中にも、服部が具体的にどの程度の指示をGHQから受けていたのかはよくわからないという証言もあり(「井本熊男インタビュー」二七〇頁)、いずれにしろこのグループおよび服部の活動の全貌については、いまだに不明の点も多い。
- (27) 以上の事情は、F・コワルスキー『日本再軍備——私は日本を再武装した』(勝山金次郎訳 サイマル出版会、一九六九年)二二二〜二二五頁参照。
- (28) たとえば、呉允台『日韓キリスト教交流史』(新教出版社、一九六八年)。
- (29) 有馬哲夫『大本営参謀は戦後何と戦ったのか』(新潮新書、二〇一〇年)。